

私たちがあきらめたら、消えてしまう。
そんないのちが、けんめいに生きていた。



□最終話 開発をすること、生態系を守ること

目を凝らさなければ、気がつかないかもしれない。池の周りに生い茂った水草に近づくと、その先端に青く細い線が現れる。それがトンボだとわかるまでには、さらにひと呼吸分の時間がかかる。

新潟・福島両県にまたがる、奥只見ダム。この地で大成建設は、J-POWER(電源開発)奥只見発電所の増設工事に携わった。工事にあたり課題となったのは、工事エリア内にある湿地環境に大きな影響を与えてしまうことだ。湿地では多様な生物がひとつの生態系をつくり、オゼイトンボなど、湿地にしか生息できない生物がいた。



□湿地を復元し、トンボの生息地を守る

工事による自然環境への負荷を、できる限り、少なくしたい。私たちが、J-POWERをはじめ、緑化計画を手がけたジェイベック、そして地域の生物研究者の方々とともにチームとして取り組んだのは、湿地をその生態系ごと、新たな場所で復元する試みだ。人工池に植生を移植して、新しい湿地を造成。そして約2年間、生き物たちが新しい湿地へと自然に移動するよう、元の湿地と新しい湿地を並存させた。工事終了から7年経つ今も、貴重なトンボたちの生息がこの新しい湿地で確認されている。

□すべての生物を考えて、あたらしい環境をつくる

人類が月にたどり着いてまだ間もない頃、宇宙飛行士の

ジェームズ・アーウィンが、暗黒の宇宙のなかで青く輝く地球を見て、「想像できないほど美しいビー玉だ」と言った。美しく暖かく生きているそれは、とてももろくて壊れやすく、指を触れたら粉々に砕け散ってしまいそうだった、と。

この地球では、数千万種の生物が、奇跡的なバランスを保ちながら生きている。いま、たった1種にすぎない人間の活動が、生物たちの未来を脅かしていることは明らかな事実だ。そして私たちゼネコンには、地球に対して大きな影響力を持つ、重い責任がある。

次の世代へ、人がすべての生物とともにいきいきとする環境をつくる。大成建設はこれからも、その理想に向かって、止まることなく一歩一歩、あたらしい挑戦を続けていく。

環境問題を考える。 ゼネコンの責任は、重い。

大成建設
TAISEI

For a Lively World